

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 143

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 2841. 創造を通じた学習と真理の確認作業
- 2842. 爽やかな日曜日の朝に
- 2843. 多様な人生
- 2844. 不思議な感覚の日曜日
- 2845. ドイツ語・フランス語:音楽という表現形式について
- 2846. ルター教会でのオルガンコンサート
- 2847. 夏期休暇の本格的な開始
- 2848. 日常と非日常を超えた視点の獲得に向けて
- 2849. ハワード・ガードナーの二冊の書籍との出会い
- 2850. ニシンの名前と夢のスペクトラム
- 2851. 即興演奏の遊び
- 2852. イデオロギーに呪縛された企業社会におけるトレーニング
- 2853. クリシュナムルティの教育思想より
- 2854. 書くことと脳の可塑性
- 2855. 固有な体験からの学び
- 2856. 自らに課す三種類の教育
- 2857. 今後の生活地について
- 2858. GRE対策に向けて
- 2859. バロック時代の二人の巨匠テレマンとバッハ:ワークライフバランスについて
- 2860. 自分の取り組みに専心すること

昼食を摂りながら、午前中にクリシュナムルティの教育思想によって喚起された事柄について再度考えていた。やはり、「創造を通じた学習 (learning by creating)」の重要性は見逃すことができないように思う。

新たなものを自ら生み出していくことを通じた学び、それは自らの知識や技術を育むことを超えて、さらなる自己理解を促し、充実感と幸福さをもたらしてくれる。私はそれを日々の実践を通じて毎日実感している。また、それらに加えて見逃せないのが、創造を通じた学習というのは、そこで「創造」がなされるゆえに、この世界に新たなものを生み出すということだ。そこには既存の教育のような、世界と自己との分断化を促すような働きは見られず、むしろその逆である。

創造を通じてこの世界につながっていくことを促すのがまさに創造を通じた学習の大きな意義だ。知識を蓄えることや技術を高めていくことだけに焦点が当てられた教育は、それそのものでは何も生み出さない。もちろん、蓄えられた知識や高められた技術が将来に何かを創造することはあっても、既存の教育においてはそこまで射程に捉えていない。より正確には、学習というのは本質的に創造的なものであり、人は創造を通じて自己を育み、この世界と深く結びついていくという発想が希薄なのだ。

あらゆる生命において創造活動というのは絶えず営まれているはずなのだが、既存の教育においてはどういうわけか創造活動に焦点を当てない。蓄えることに取り憑かれている様は、貯蓄に取り憑かれている現代人の様子と何ら変わらない。

先日、投資の本質には創造があるということを述べたように思う。まさに、創造を通じた学習とそれは密接な関係をなしている。現代人の多くは、金銭を蓄えることや知識・技術を蓄えることに躍起になっている。あるいは、知識や技術に関してはむしろそれとは逆にそれらを涵養することに怠惰な人たちが多く見受けられるのも確かだ。いずれの場合にせよ、そこには創造という大事な発想が欠けている。創造を通じた学習というのは一つ自分にとって大事な主題のようだ。

ようやく空が晴れてきた。確かに灰色の雲はまだ空の大部分を占めているが、それでも青空が見える部分が増えてきたのは間違いない。これから夕方にかけて少しずつ晴れ間が増していこう。

---

---

自分が納得のいく範囲で説明を施していくこと。日々文章を書く際に大切にしているのはまさにその点である。納得のいく形で文章を書き、納得のいくところまで文章を書いていく。それは今後も継続していくことだ。

ここでの一連の日記は、「 $1+1=2$ である」という自明な事柄について日々説明を繰り返しているだけに過ぎず、同時に「 $1+1=2$ ではないこともありうる」という真理について説明を繰り返しているに過ぎない、と窓の外を眺めながら思った。一見するとそうした説明を施すことは面倒なように思えるかもしれないが、自分にとってはそれをしなければ前に進んでいくことができない。真理が真理であることの確認と、真理が真理ではないという真理の確認を納得のいく形で納得いくまで行っていくこと。それが日々の日記の要諦だ。

気づけば今日もすでに様々な事柄について文章を書き留めているが、これから夕方にかけて、そして夜にも何か文章を書き留めておくかもしれない。フローニンゲン:2018/7/14(土)12:59

#### 2842. 爽やかな日曜日の朝に

日曜日の朝を静かに迎えた。今日はいつもより随分と遅く七時に起床した。昨夜就寝したのはいつもの通り十時であったため、昨夜は随分と寝ていたことになる。そのおかげもあってか、今朝の起床時には自分の内側の中で何か十分な発酵を遂げたように感じた。

今朝は昨日の朝とは異なり、雲一つない青空が広がっている。風もほとんどなく、街路樹の葉先を静かに揺らす風が時折吹くほどである。

小鳥たちが元気に空を飛び回っている姿を見た。同時に、近くの木で休んでいる小鳥たちの澄み渡る鳴き声が聞こえて来る。今朝はどこかとても爽やかだ。日曜日の朝にふさわしい。そんな休日の日曜日だが、私が行うことはいつもと変わらない。日記の執筆、読書、作曲、デッサン、それら四つで満たされた時間が過ぎていくだろう。

一つ昨日と異なることを挙げるとすれば、今日は午後からルター教会に足を運び、バロック時代のオルガン音楽を聴きに行ってくる。今日は一日を通して素晴らしい天気であり、ルター教会まで散歩がてら歩くことは大変気持ちいいだろう。また、昨日予定していた別の教会でのオルガンコンサー

---

トに行くことをしなかったので、今日は久しぶりにオルガンコンサートを聴きにルター教会に行くことにした。昨日のコンサートは無料のものであり、今日のコンサートは有料のものだ。

おそらく今日のコンサートは経験のあるプロの演奏者が担当するのだろう。テレマンやバッハらの曲に範を求めることが多い私にとって、バロック時代の音楽には関心がある。本当に良いタイミングでこのコンサートがあることを有り難く思う。コンサートの開始時間は15時であり、それまではいつもと同じ活動に従事していきたいと思う。

昨夜、論文アドバイザーのミハエル・ツシオル教授から誤字脱字がレビューされたドラフトを受け取り、その修正を持って最終版にすることを許可してもらえた。いよいよこの論文を大学に提出し、この論文から手を離す日がやってきた。ツシオル教授に直してもらった箇所はワードの履歴に残っており、それらをもう一度自分の目で確かめる。その後、全体をもう一度読み返し、提出用のPDFとする。出来上がったPDFに対しても全体をもう一度確認しておきたいと思う。それが完了すれば、二人の論文審査官に提出する。その瞬間に、フローニンゲン大学での二年目のプログラムが本当に終わったことを示す。

論文の最終確認及び二人の審査官への提出は今夜行おうと思う。夕食後に一時間か一時間半ほど時間を確保すれば十分であろう。

今回無事に論文を提出できることは昨年以上に喜びの感情をもたらす。その安堵感の出所についてはこれまでの日記で書き留めていた通りである。明日からは一段と本格的に、何にも煩わしさを感ずることなく自分の探究活動と創造活動に従事していくことができるだろう。ルター教会でのコンサート、そして論文の提出が楽しみだ。フローニンゲン:2018/7/15(日)07:52

### 2843. 多様な人生

今日は日曜日ということもあってか、目の前の通りがとても落ち着いている。通行人の姿は全く見られず、道行く車もほとんど見られない。通り抜けていくものといえば、風と鳥たちぐらいだろうか。

今、ぼんやりと書斎の窓の外を眺めている。どこまでも広がる青い空。その空を時折横切っていく鳥たち。

---

赤レンガの家々と、その屋根に照らされる優しい朝日。そして、微風にたなびく街路樹。それらの全てが全体として一つの動的な景色を構成し、私をくつろがせてくる。

景色をぼんやりと眺めること。実はこの行為の中に精神の治癒と変容を促す作用があるのではないかと感じてしまうほどだ。

昨日読み終えたクリシュナムルティの書籍の中に、流れ行く雲を眺めること、そして鳥たちの鳴き声に耳を傾けることの大切さが偶然にも書かれていた。それらは私が意識せずとも毎日行っていることだ。

毎日、しかも一日の間に何度も窓の外の景色を眺める人生。北欧にほど近いオランダのフローニンゲンという街で一人の人間が固有の物語を通じて生きている。こうした人生があったということ。ある街に住む人間のそのような人生があったということを書き留めておく。

この世界は本当に多様性の恩恵を受けて成り立っているのだと昨日改めて思った。多様性がなければこの世界は崩壊してしまう。また、多様性がなければ変容も創造も起こらないことを知る。それにもかかわず、この現代社会は表向きは多様性を強調しながらも、内実は画一化の方向に向かっている。

日々誰も流れ行く雲を眺めたり、小鳥の鳴き声に耳を傾けないのであれば、自分がそれをしよう。それはささやかながらも、画一化を促す現代社会への大きな抵抗だと思うのだ。そして、流れ行く雲を眺めたこと、小鳥の鳴き声に耳を傾けたことを書き留めておこう。いや、それらの行為から喚起された固有の内的感覚を書き留めておこう。

絶えず私たちの人生には別の無数な生き方があるということを忘れてはならない。それがこの世界の多様性をなんとか確保している。

今日はこれから過去に作った曲を二曲ほど編集する。その際に、まずは曲を聴きながらその曲によって喚起される感覚をデッサンとして記録しておきたいと思う。絶え間ない記録と観察。そして観察からの仮説立てと仮説検証に向けたアクション。結局のところ、私は毎日それらだけを行っている。とりわけそれは作曲実践において強く見られる。

---

デッサンをしていて不思議なのは、往々にしてそれが默想的な意識を引き起こすということだ。これは下手な瞑想よりも本質的な瞑想だと言ってもいいのではないかと思う。黙々とデッサンに勤しんでいると、それは表層的な意識を一度宙吊りにし、深い意識に入っていくことを促す。作曲においても時にそうした状態になるが、作曲は思考と感覚をより全面に発揮していく必要があるため、デッサンをしている時の感覚とはやはり異なる。だがいずれにせよ、両者がなんとも言えない充実感と喜びをもたらしてくれることは確かだ。

今から二曲ほど編集し、その後にショパンに範を求めて一曲作る。曲が出来上がったら過去の日記を今日は編集したい。そうこうしているうちに昼食の時間がやってくるだろう。フローニンゲン：  
2018/7/15(日)08:12

#### 2844. 不思議な感覚の日曜日

本当に静寂な朝だ。時刻は午前十時を過ぎ、普段であれば街が生き生きと動き出している頃である。確かに太陽の光はもう十分に強いのだが、辺りはまだ至って静かだ。どこかの湖畔に鳴り響くような鳥たちの鳴き声が聞こえて来る。

爽やかな天気。風の通り道も喜んでいるかのようだ。

今朝は幾分形容しがたい気持ちでいる。それは気持ちというよりも内的エネルギーの状態だと言った方が正確かもしれない。とにかく焦って何かに従事するような状態ではなく、ゆっくりと物事を進めていこうとするような状態がここにある。もうしばらくしたら過去の日記を編集したいと思う。20本ほどの日記を今日中に編集できればと思う。

活動をゆっくりとさせる状態の中で、少しばかり書くことについて考えていた。内的感覚そのものは主観的なものに他ならないが、それをひとたび言葉によって形式化させると、そこにはある不可避の客観性を帯びる。それは言葉になったことによって初めて生まれる客観性だ。言葉にはそもそも絶対に引き剥がすことのできない客観性が内包されている。

ある事象がいくら主観的なものであったとしても、それがひとたび言葉になると不可避の客観性を帯び、検証対象になることができる。書くことによって形式化していくことの意義の一つはまさにここ

---

にありそうだ。書くことによって存在を形作っていくというのはまさにその通りであり、掴み所のない主観的存在は、言葉という不可避の客観性を帯びたものによって形になっていく。遠くの方から聞こえて来る小鳥の鳴き声に耳を傾けながらぼんやりとそのようなことを考えていた。

それにしても昨日読み終えたクリシュナムルティの書籍は本当に傑作だった。教育哲学に強い関心を寄せている今の私にとって、あの本は本当に優れた洞察を含むものであった。また近々読み直すことになるだろう。

優れた書籍は何度も読み返すことが必要だ。下線を引いた箇所、書き込みをした箇所は、次回改めて読み返した時にまた異なる考え、そしてより深い考えをもたらすことを促してくれるに違いない。教育哲学全般と、芸術教育に関する哲学思想を特に中心とした探究を進めていく。

今日は15時から街の中心部のルター教会で行われるパイプオルガンコンサートに参加する。昨日にも別の教会でオルガンコンサートがあったが、昨日の気分はコンサートに出かけるような気分ではなかった。外に出かけるよりも家にいて、読書や創造活動に従事している方が望ましいように感じていた。今日は一転して外出したい気持ちで一杯だ。それは空がこのように晴れ渡っているからということもあるだろうし、その他にも要因があるだろう。

前回ルター教会でコンサートに参加した時は、参加者の年齢層の高さに驚かされた。平均すると65歳ぐらいになっていたのではないかと思われる。それはどこか、先日調べた豪華客船での世界一周の旅に参加する平均年齢と瓜二つであることを思い起こさせた。

果たして今日のコンサートに参加する人たちの年齢はいかほどだろうか。そうしたこともコンサートに参加する際の楽しみな観察点である。フローニンゲン:2018/7/15(日)10:29

#### 2845. ドイツ語・フランス語: 音楽という表現形式について

今日はオルガンコンサートから帰って来たらルーミーの詩集を読みたいと思う。一気に読み進めるのではなく、何編かの詩を少しばかり読むことになるだろう。

---

先日、マラルメの詩集を読み終えた。近々リルケの英独両方の言語が記載された詩集を読みたいと思う。マラルメの詩集についてはフランス語の言語も記載されていたのだが、私はフランス語が読めないため英訳を読むしかなかった。今度はリルケの詩集に関しても同じことが起こるだろう。

ここでふと、フランス語とドイツ語を学びたいという思いが少々湧き上がってきた。これはまだ強い気持ちではない。確かに英語に習熟していればこの世界の多くの場所で困ることはほとんどなく、特に学術的な情報を得る場合においてはドイツ語やフランス語以上に英語の方が有益である。

だが一方で、英語に頼るあまりにドイツ語やフランス語でしか展開されていない思考空間があるのも確かであるということに気づいている。ドイツ人にせよ、フランス人にせよ、学術的な成果を発表する際にはもはや英語で文章を執筆することがほとんどなのは確かだと思うが、それでもドイツ語やフランス語でしか残されていない叡智が紛れもなく存在していることも確かだろう。

ドイツ語とフランス語の一つ一つを分けて学ぶことは面倒なので、それらを同時に学ぶことができないかと考えていた。理想はそれらの言語を扱う国で生活することだ、ということを考えていると、スイスはまさにドイツ語もフランス語も公用語にしていることを思い出した。もちろんスイスのどの都市に住むかによって公用語の種類は変わってくるが、どちらの言語も扱っている都市で生活しながらそれらの二つの言語を学んでいくのも悪くはないと思った。英語と日本語だけに頼りすぎている今の自分に少々情けなさを感じているため、近い将来にスイスで生活をしようかと検討し始めている。

来年の春もしくは初夏にスイスに訪れる計画をしていたのは、生活の候補地を探すという意味合いも多分に含まれているように思う。二年前の夏に訪れたニューシャテルも多分に風光明媚な街であったが、来年の旅行ではスイスの主要都市を訪れようと思っている。

午前中に断続的に文章を書くことによって、徐々に活動エネルギーの状態が整ってきた。活動に向けてあまり乗り気ではない時は、書くことが私にとってが一番のようだ。内側の中でまとまりを見せずに蠢いているものをあるべき形として言葉にしておくということ。これが内側の流れを再び淀みないものにしてくれる。

青空に幾筋かの飛行機雲が見える。つい今しがた、言葉はどこまで正確に現象を描写できるのかについて考えていた。これは以前にも考えたことのあるテーマである。そこにはある種の完全性と不

---

---

完全性がある。これは文章のみならず、絵画や音楽にも当てはまることだと思う。だからこそ人間は様々な表現形式を編み出したのだと思う。そして私自身が、一つ一つの表現形式の完全性と不完全性に気づいてしまったがゆえに、それら全ての表現形式を組み合わせながら日々の創造活動に従事するようになったのだと思う。だが、なぜシュタイナーをはじめとして、何人かの哲学者が音楽を最も高い表現形式とみなしたのかを考えてみる必要がある。音楽にしか表現できないことは音楽では表現できないことを超えていく力を持っており、またそれは他の表現形式でしか表現できことを超えていく力があるのだろうか。それについては引き続き実践を通じて考えていきたいと思う。今日のオルガンコンサートに参加することも、この主題について何かしらの洞察をもたらしてくれるかもしれない。

気がつけば午前11時を迎えた。今日は遅く起きたためか、午前の時間が過ぎていくのが早く感じられる。フローニンゲン:2018/7/15(日)11:11

#### 2846. ルター教会でのオルガンコンサート

つい先ほどルター教会で行われたオルガンコンサートから戻ってきた。幾分夢心地な感覚がまだ残っている。

午後三時から行われたコンサートの曲目はバロック時代の曲で構成されていた。いつもクラシック音楽のコンサートに参加して思うのは、毎回必ず何かしらの新しい発見があるということである。

今回も私は、一時間の演奏の間中ずっと目を閉じながら音楽に耳を傾けていた。それは多分に瞑想的であり、同時に様々な考えなどが浮かんでいた。しかしコンサートの最後にはそうした考え事すらも消えてしまうような境地の中にいたように思う。演奏を聴きながら考えていたのは、芸術教育と霊性教育の密接なつながりに関してである。それら両分野、そしてそれら二つを思想的に架橋するような試みに従事していこう、という気持ちを新たにした。自分がこれから進むべき方向はまさにそこにあると確信して疑わなかった。

その後私は、「音楽を理解するとはどういうことか？」ということについて少しばかり考えを巡らせていた。全く解答らしきものは出ていないのだが、その問いは本当に気になる。「ある曲を理解できた」と

---

思うような直感的な瞬間を経験したことのある人も少なくないはずである。その時、私たちの内側で一体どのようなことが起こっており、それはどのように説明できるのだろうか。

この問いへの解答は美学や認識論に関する理解が必要なかもしれない。これは音楽のみならず、他の芸術にまで拡張できる問いであり、「芸術を理解するとはどういうことか？」という問いに形を変えることができる。この問いについても自分なりの解答を得られるようにこれから探究を進めていく。

一時間のコンサートはあっという間だったように思う。コンサート終了後、私は少しばかりその余韻に浸り、教会を離れようとしたところ、二人の夫妻から声をかけられた。彼らの手元にはワイングラスがあり、「あそこでワインがもらえるから、ちょっと話でもどうか？」と声をかけられた。今回のコンサートは飲み物付きなのだということをその時に初めて知った。

コンサートが終わった時刻は午後の四時であり、時間としては早いですが、二人の夫妻の勧めもあり、普段は飲まないアルコールをちょっとばかり楽しむことにした。二人は隣町のアッセンから来たようであり、教会コンサートにはよく足を運ぶそうだ。「音楽学校に通っているの？」という質問を受けたが、フローニンゲン大学で心理学や教育学を専攻していると述べた。

「音楽学校には通っていないが、作曲することは好きです」ということを私が述べると、「これまでどんな楽器の演奏経験があるの？」と尋ねられた。私は楽器の演奏経験が一切ないことを伝えると、二人の夫妻はとても驚いた表情で、「それでどうやって作曲をしているの？」と尋ねてきた。

この問いかけが意外と忘れられず、確かに自分は楽器の演奏経験が一切ないにもかかわらずどうやって作曲をしているのだろうか、と改めて考えさせられた。私にとってみれば、それは多分に絵を描くことや文章を執筆すること、プログラミングのコードを書く感覚と同じであり、演奏経験の有無はほとんど問題にならないように感じていた。とはいえ、一般的に作曲家は必ず何かしらの楽器の演奏経験があるものであり、それを考えると、私の作曲方法と出来上がる曲には特殊なものがあるのかもしれない。今のところ楽器を演奏することは全く考えておらず、とにかく曲を作ることだけが楽しい。今後もそれを突き詰めていく中で特殊な作曲方法や特殊な曲が生まれてくるかもしれない。今日のコンサートでの体験についてはまた改めて文章を書き留めておこうと思う。フローニンゲン：

2018/7/15(日)17:25

---

## 2847. 夏期休暇の本格的な開始

今朝は六時に起床し、六時半から一日の活動をスタートさせた。昨日は七時に起床していたが、今日からはまた六時に起床するリズムに戻った。

月曜日が少しずつ始まりを迎えているのを感じている。この時間帯はまだ朝日が柔らかく、外の雰囲気もこれから一日が始まろうとしている様子を醸し出している。ただし昨日の日曜日とは異なって、この時間帯からもうすでに通りを行き交う人の様子を確認することができる。フローニンゲンの夏の一日の始まりは早い。

昨夜無事に論文を二人の審査官に送ることができた。これにより、論文の執筆に区切りがつき、それはフローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えたことを意味する。論文を提出することができて今は安堵感に包まれている。同時に、今日から始まる夏期休暇への大きな期待感を持っている。

実は二週間前の水曜日に研究発表を終え、その時に一度論文を提出したことをもって夏期休暇に入れると思っていた。実際にそこから数日間は夏期休暇のような過ごし方をしていた。ところがそこから一変して、論文を幾分修正する必要に迫られ、結局昨日までは完全な夏期休暇とは言い難かった。だが今日からはもう本当に夏期休暇に入ったとみなしていいだろう。

以前から計画していたように、この夏期休暇においては旺盛な読書、そして旺盛な創造活動を進めていく。また、七月と八月にはそれぞれ一回ずつ旅に出かける。今回の夏期休暇が充実したものになることをすでに予感している。

今ふと思ったが、もはや今日からの生活を「夏期休暇」という言葉を当てる必要などないのではないかと思った。これからの一年間は、本当に自分が従事したいと心底望むものにだけ従事できる時間となり、実質的にはこの一年間は全て休暇のようだとも言える。いや、これは今年の一年間だけに限らせてはならない。これから生涯にわたってこのように生きて行く必要がある。日々が常に休暇であるような落ち着きを保ち、その中で絶えず自分が打ち込むべきことに打ち込んでいく。そのような生活が今実現されつつある。

---

そう考えてみると、今日からの生活は、これから生涯にわたって続いていくであろう真の生活の始まりを意味しているのだ。もう他者や組織に煩わされるような生活はしないようにしよう。何となれば他者や組織は人の生活を惑わすのだから。

今日からの読書は、まずは詩集と教育哲学が中心になるだろう。今日はルーミーの詩集を読み進め、時間があればクリシュナムルティの“Krishnamurti Beginnings of Learning (1982)”の初読を開始する。この夏は、美学や芸術教育に関する書籍、そして音楽理論や作曲理論に関する書籍も積極的に読むことになるだろう。八月が終わる頃には、書斎の机の上に積み重ねられた書籍を全て読み終え、ソファの上に置かれた書籍に関しても初読を終えることができるだろう。そうすれば秋からは諸々の書籍を再読し始めることができる。今日から始まる夏期休暇に期待が募り、夏の一日一日が充実感ではちきれそうなものになるであろうことを確信している。そうした日々を送ることができれば、秋以降にやってくる厳しい冬もきっと充実感を持って乗り越えることができるはずだ。フローニンゲン:2018/7/16(月)06:51

#### 2848. 日常と非日常を超えた視点の獲得に向けて

数羽の鳥が早朝の青空の下を優雅に飛んでいく姿を見た。今日は雲一つない青空が広がっており、風も爽やかだ。ただし、今日と明日は最高気温が27度に達するようであり、午後は暑くなるだろう。とはいえ、フローニンゲンの夏はそうした気温でも過ごしやすい。クーラーなどを一切使わずに、自然な状態でその気温に順応できることは心身に良い影響を及ぼすに違いない。

ここ数日間、自己からヌルリと脱却する感覚が何度か訪れた。それは特に昨日に参加したルター教会でのオルガンコンサートの帰り道に顕著だった。自分が自己だと認識している対象から抜け出し、その外にいてこの世界を眺めているような感覚がしばらく続いていた。小さな自己から離脱しているのだが、それでもこの小さな自己との関係が完全に断ち切れているわけではない。

小さな自己を絶えず見つめているような感覚がしばらく自分を包んでいた。こうした体験は以前から何度もしているが、欧州での生活を始めて以降、その頻度は増すばかりである。また、一度の体験における時間も長くなっているように思う。こうした体験を引き起こすほどに、昨日のオルガンコンサー

---

トには何かしらの力があつたのだろう。これがまさに、昨日考えようとしてた芸術教育と霊性教育の接点を示唆するものかもしれない。

芸術体験は間違いなく私たちに非日常的な意識に誘ってくれる。それができないものはもしかすると芸術と言えないのかもしれない。そうしたことを考えると、芸術の定義らしきものが浮かび上がってくる。いずれにせよ、芸術の意義の一つには、普段自分が感じ得ないような感覚をもたらすきっかけや、普段自分が考えないことに考えを巡らせるきっかけを与えてくれることにあるような気がしていた。

ルター教会の椅子に腰掛けながらオルガンの音色に耳を傾けていると、内省的な意識となり、自己及び人生、そしてこの現代社会の有り様に自然と考えが及んでいた。そこで起きていたのは意識の拡張と思考の拡張であり、芸術体験はこうした現象を誘発させる。

もしかすると、見方を変えれば芸術というのも一種の幻想であり、その幻想体験は、日常という幻想をまた別の視点で眺めることを可能にしてくれるのかもしれない。つまりここには二重の幻想が存在しており、日常という幻想を日常の目で眺め続けていてはその幻想性に気づくことはできないが、芸術という非日常的な幻想の中に浸ることによって、日常という幻想の幻想性に気づくのである。そして芸術体験が真に霊性に触れるようなものであればあるほどに、芸術の幻想性にさえも気づくことが可能になってくる。要するにここでは二重の幻想を超えて、より超越的な視点を持って自己及びこの世界を眺めることが可能になるということだ。

そうしたことを考えてみると、昨日に経験した自己から離脱する感覚というのはまさに、真に霊性に触れるような体験からもたらされたと言ってもいいかもしれない。こうした自分自身の直接体験をもとに考えを進めていくと、日常の幻想と非日常の幻想から真に目覚めるために芸術を愉しむための芸術教育と、超越的な存在に触れ、超越的な視点から自己及び世界を眺めるための霊性教育は非常に大切なものになることがわかる。

自分に対して問いを投げ続け、その問いに対してわずかばかりでも文章を書き続けることによって、徐々にその問いへの自分なりの答えと新たな問いが生まれることを嬉しく思う。芸術教育と霊性教

---

育に関する探究はこれから本格的に始まっていく。そんな予感がしている。フローニンゲン:2018/7/16(月)07:09

#### 2849. ハワード・ガードナーの二冊の書籍との出会い

今朝は少しばかり芸術教育や創造性に関する調べ物をしていて、すると偶然にも、ハーバード大学教育大学院教授ハワード・ガードナーの興味深い二冊の書籍と出会った。どちらも一般書なのだが、私の関心を強く引いた。一冊は、“Truth, Beauty, and Goodness Reframed: Educating for the Virtues in the Age of Truthiness and Twitter (2012)”というタイトルのものだ。

ガードナーの書籍に関しては昨年に数冊ほど創造性及び芸術と人間発達に関するものを読んで以降、しばらく彼らの書籍を読むことはなかった。だが、ここに来て上記のタイトルの書籍はまさに現在の私の関心に強く響くものであり、先ほど迷わず購入をした。

ガードナーは発達心理学者でありながらも、哲学や芸術にも造詣が深く、改めて彼の仕事を辿り直してみたいという気持ちになっている。教育において真善美の三つの領域をどのように扱っていくのか、それについては私の最大の関心事項と言ってもよく、そこに芸術教育と霊性教育を関連付けて考察を深めていきたいと思う。その際に本書は有益な方向性と多くの洞察を与えてくれるだろう。もう一冊購入したのは、“Creating Minds: An Anatomy of Creativity Seen Through the Lives of Freud, Einstein, Picasso, Stravinsky, Eliot, Graham, and Gandhi (2011)”というタイトルのものだ。

ガードナーは積極的に一般書を執筆する学者であり、以前はあまりそれを好ましいと思っていなかったが、昨年「一般書」と自ら括っていたガードナーのある一冊を読んだ時、その書籍が実に洞察溢れるもので驚いたのを覚えている。それ以降、学術的な専門書だけではなく、再度一般書にも目を向けようという気持ちになり、それが上記の書籍の購入を後押しした。ここ最近では、時に一般書の方が学術的な専門書よりも深い洞察を開示している場合があると考えるようになった。その背景には、学術的な専門書の方が文章執筆に対する制約が強く、それが必然的に語られてはならないものを生み出すことにつながってしまうことが挙げられる。

往々にしてこの「語られてはならないもの」の中に読者としては面白さを感じるものであり、そうしたことから、学術的な専門書は確かに結晶化された知を提供してくれるものの、それはとかく無味乾

---

---

燥なものに陥りやすい。とりわけこの何年間か膨大な量の学術的な専門書を読む中でそのようなことを最近よく思うようになった。

時刻は午前九時を迎えようとしている。今日は早朝に調べ物をしていたこともあり、まだ何も本格的な活動を始めていない。時間も良い頃合いになってきたので、これから作曲実践に取り掛かりたい。バッハのコラールとショパンのマズルカに範を求めて作曲をし、その後にルーミニエールの詩集を読む。午後からは昨日と同様に、20本ほど過去の日記を編集したいと思う。そして夕方にまた作曲実践を行う。一日の活動を緩やかにそして着実に前に進めていく。街路樹が早朝の風に揺れる姿は心を深く和ませる。フローニンゲン:2018/7/16(月)08:59

### 2850. ニシンの名前と夢のスペクトラム

今日はこれから昼食後の散歩を兼ねて、近所のスーパーに買い物に出かける。今は青空が広がっていて、本当に散歩日和だ。自宅の目の前の通りの工事もししばかり進み、これまではスーパーへ行く際に遠回りをしなければならなかったが、即席の道ができた。そこを通過してゆつくりと歩きながらスーパーへ向かう。

昨日、昨年よく食べていた魚の日本語名が出てこなく、なんとか思い出そうとしていたがダメだった。あえてインターネットで調べるのではなく、あの手この手を使ってその名前を思い出そうとしていた。英語では“herring”という名前であり、英語の名称と見た目については完全に頭の中で一致していたのだが、どうにも日本語が出てこない。昼食前に過去の日記を編集していると、偶然ながらその魚に言及している日記と出くわし、その魚がニシンという名前であることを思い出した。全くもってどうでもいいことのように思えるのだが、ニシンの名前を思い出してとてもすっきりした感覚になり、同時に、まさかニシンに言及している過去の日記を改めて読み返すことになるとは思ってもいなかったため、その偶然に驚いた。

太陽が少しばかり雲に隠れた。夢の続きであるかのような現実世界が目の前に広がっているように感じられる。夢のスペクトラムと意識のスペクトラムは結びついており、それらは即リアリティのスペクトラムとも対応していることを先ほど考えていた。古典的には、夢と現実の境界線に関する話と関係しているが、両者の境界線だけに焦点を当てるのではなく、両者の階層構造に焦点を当てることが

---

大切だ。あるいは、無数の階層を持つ両者の入れ子構造に焦点を当てることが大切だと言ってもいいかもしれない。何において大切かという、この世界において目覚めながら生きていくことにおいてである。

太陽がまだ小さな雲に隠れており、辺りは少しばかり陰の世界となった。爽やかな風が街路樹を揺らしている。通りには風に揺られる夏草の姿を眺めることができる。それを見て、自分の心が共振している。この世界における揺れに対してシンクロナイゼーションする自分の心。揺れとシンクロナイゼーションはこのリアリティに遍満している。そのようなことを考えていると、再び太陽が顔を覗かせ、夏らしい光を地上に降り注ぎ始めた。そろそろ近所のスーパーまでゆっくりと散歩をしてこようと思う。スーパーから戻ってきたら、ルーミーの詩集を読み、その後、モーツァルトに範を求めて作曲実践を行う。その後夕方から過去の日記を20本ほど編集したいと思う。夏の世界と散歩が自分を待っている。フローニンゲン:2018/7/16(月)14:05

#### 2851. 即興演奏の遊び

時刻は午後の七時半を迎えた。相変わらずこの時間帯は西日が強く、まだまだ外は明るい。しかし、普段就寝する夜の十時ぐらいになってくると以前よりも日が沈むのが少しばかり早くなっていることにも気づく。季節が少しずつ進行しているのを実感する。

今日は午後に、久しぶりに外付けのキーボードに触れながら音を出していた。作曲をするときはもう外付けのキーボードではなく、パソコン上のキーボードで諸々の作業を進めるようになっていた。

今日改めて外付けのキーボードを用いて音を出していると、脳に別種の刺激がもたらされているように思った。キーボードを叩く手をあえて利き手ではない左手で行っていたということもあつてか、普段刺激されない脳の部位が活性化していたように思う。

何か楽譜を参考にしながら音を出していたのではなく、即興的に音を鳴らしていたことも特殊な脳の働かせ方を助長していたのかもしれない。左手で即興演奏をすることが、脳にとっての良い刺激となったことを実感し、毎日30分ぐらい即興的に音を出す遊びに興じてもいいのではないかと思った。この遊びの良さは即興性にあり、即興的に音を奏でている時は、デッサンと同じような瞑想をし

---

ているかのような意識状態になる。その特徴としては、脳に思考などの知的判断を含め、何の制限もかけずに脳を解放させるかのような感覚もある。

脳と自らを解放させるかのように今日は午後にキーボード上で即興的に音を鳴らし続けていた。意識が瞑想的なものになるためか、何とも言えないリラックス感がもたらされ、自らの意のままに音を外に出すということが表現活動後のあの爽快感をもたらす。左手で即興演奏をすることに関しては明日からまた観察をしたいと思う。

本当に一日があつという間に過ぎ去っていき、毎日日記を書き続けていなければ時間感覚がどんどん失われていく。そういえば、昨日は街の中心部のルター教会でオルガンコンサートに参加していた。コンサートが終わった後に、飲み物を片手に参加者とちょっとした歓談をする機会があり、その時に一組の夫妻と話をした。その時に、自分が作曲を日々行っていることを伝え、私には一切の演奏経験がないことを合わせて伝えると、それについて驚いていたことを改めて思い出す。

もしかしたら今日キーボードを久しぶりに触れてみようと思ったのは、「演奏経験がないのにどうやって作曲しているのか」という質問に触発されてのものだったのかもしれないとふと思う。今の私は他者が作った曲を演奏することには一切関心がないため、ピアノの演奏を習うことはないと思うが、毎日即興的に音を出すことに興じたいと思う。これも一つの演奏体験となり、自分の作曲実践の肥やしになっていくように思える。今日はこれからクリシュナムルティの書籍の続きを読み、その後に編集途中の過去の日記記事の編集を完成させる。今日も密度の濃い一日であった。フローニンゲン：  
2018/7/16(月)19:39

## 2852. イデオロギーに呪縛された企業社会におけるトレーニング

今日は昨日の天気予報と異なり、どうやら終日晴れようだ。起床直後、朝日が寝室の中に差し込んでくるのを見てそのように思った。

昨日の天気予報では、今日は昼食後に少しばかり雨が降るようだった。だが、今朝方天気予報を再度確認してみたところ、今日は雨が降らないとのことである。今は少し薄い雲が空全体を覆っているが、それでも朝日の光は地上に差し込んでいる。今日の天気は晴れとのことなので、昼食前にノーダープラントソン公園へランニングに出かけたいと思う。

---

---

ランニングから戻り、昼食を摂り終えたら、あるメディアからの取材を受ける。取材を担当してくださる方もオランダに住んでいるようなので、雑談として少しばかりオランダの話もするかもしれない。今回の取材は、30～40代のミドルキャリアの管理職に向けた部下の育成や部下への仕事の任せ方などがテーマになっている。この取材が公開されたらまた何かを書き留めておきたいと思う。

成人発達理論を活用した企業人の成長支援に携わって数年ほど経つが、ここ最近特に思うのは、企業人の成長支援において真に大切なことは企業社会の中でしか通用しないような技術を一生懸命に磨くことを支援するのではなく、企業社会の外に出られるようにするための技術と精神を養う支援を行うことだと思う。

現在、企業社会の中におけるほぼありとあらゆる人財開発の枠組みは全て、企業社会の中でいかにうまく生きていくかに焦点が当てられており、結局企業人が企業社会の外に解放されることには何一つ役に立たない。そこで提供されているトレーニングを眺めてみると、企業社会という特定領域に特化した知識と技術の鍛錬がなされており、そうしたトレーニングをいくら積もうとも、企業社会の思想や制度の呪縛からいつまでたっても解放されることはないだろう。

人間の発達とは究極的には特定のイデオロギーや制度的な呪縛から解放され、自分なりの意味と充実感を持って日々を生きていくことを目指すものであることを考えると、現在企業社会で提供されている人財開発という名のトレーニングとはそれと真逆のことを目的にしている。つまりここでは、企業社会のイデオロギーと制度に企業人を絡め取ることが目的にされているのである。

ここ数日間、インドの思想家クリシュナムルティの書籍を何冊か読んでいる。その中で、クリシュナムルティが指摘するように、特定のイデオロギーや制度から解放されていくためには、徹底的な自己理解が必要であり、自らがどのようなイデオロギーや制度に呪縛されているかを把握することがまず求められる。

企業社会では相変わらず内省実践が叫ばれているようだが、企業社会に蔓延するイデオロギーや制度に自覚的になれないような内省実践にどのような意味があるのだろうか。ここでも、企業社会における内省実践が私たちが企業社会から解放してくれることに役立つのではなく、逆にそこに縛る方向に作用していることがわかるだろう。

---

人間として生きていく上で大事なことに気づかせてくれないのが企業社会における多くの内省実践の実情だ。ある会社の中でうまく振舞って出世することだけに躍起になることは、他の会社の人間から見れば馬鹿げているだろうし、企業社会の中で報酬と出世を求め続けるような生き方は、他の分野の社会から見れば馬鹿げているように見えるはずである。結局人は、特定の社会思想と構造に縛られ、人間として生きていくことは何かという本質的な問いとは向き合わない形で日々を過ごしているのだ。フローニンゲン:2018/7/17(火)07:14

### 2853. クリシュナムルティの教育思想より

今日はこれからバッハとサティの曲に範を求めて作曲実践を行う。昨日より、バッハの短めのコラールから一日の作曲実践を始め、一日の作曲実践の終わりにもバッハのコラールを参考するようになった。結局昨日は四曲ほど作ることができた。一日三曲作ることが習慣になり始めていたが、このように一日に四曲作ることも全く不可能ではなく、むしろ今はバッハのコラールを全て参考にすることに力を注いだ方が良いと思われるため、朝と夜にバッハの曲に範を求めることを新たな習慣にした。とにかく今は大量の曲を次から次に作っていくことによって実践量を増やし、豊富な実践体験を積んでいくことが大切だ。そうした膨大な実践の過程の中で絶えず振り返りを行い、気づきと発見を集積し、新たな仮説につなげていく。

自分が現在行っている実践方法を眺めてみると、それは多分に教育学における学習理論がうまく活用されているように思う。フローニンゲン大学の二年目で学習したことが自分の実生活の中に溶け込んでいることを見て嬉しく思う。作曲理論を学習する際、そして作曲技術を高める際に、教育学における学習理論は非常に役に立つ。そうした理論的な枠組みを持って日々の実践がより豊かなものになっているのを実感する。

バッハとサティに範を求めて作曲実践を行ったら、昨日から読み始めたクリシュナムルティの書籍を読み進めていきたい。おそらく今日中に初読が終わるだろう。

先日読み終えたクリシュナムルティの書籍もそうだが、今読み進めている書籍も非常に得るものがある。今後教育哲学に関する探究をより本格的に行っていく際に、クリシュナムルティの教育思想とシュタイナーの教育思想は核になっていくだろう。

---

昨日クリシュナムルティの書籍を読みながら、あれこれと考えさせられることがあった。一つには、両親が本当に子供を愛し、子供の教育について真剣に考えているならば、現行の教育の改革に乗り出していくはずだ、という指摘について考えさせられていた。クリシュナムルティはその指摘に付け加える形で、親は結局金銭の獲得に忙しく、真に子供を愛することや真に子供たちの教育の重要性を考えていない、と指摘している。この指摘は現在の親のあり方と子供の教育に対する親の態度にも当てはまるように思えて仕方ない。

金銭獲得に躍起になるばかり、子供を真に育ててくれる教育が一体どのようなものであるかを深く考える余裕が現代の親にはなく、結果として、子供の教育を特定の教育機関に完全に委譲するという教育放棄に至る所で見られる。

私は世界の様々な教育機関で学びを得てきたが、結局のところ、真に自己を深めてくれるような学びは教育機関の外にあるのではないかと思いはじめている。確かに、例えば私はこの二年間においてフローニンゲン大学で多くの学びを得てきた。しかし真に自分を深めてくれるような学びは大学で教えられるものとは関係なく、自らの探究心に基づいてなされる学びや体験だったように思う。逆説的だが、ある教育機関における教育が優れていればいるほどに、それは教育機関での学びから私たちを解放してくれるように思う。

この基準を持って既存の教育機関を眺めてみた時に、どのようなことが言えるだろうか。おそらく、多くの教育機関は私たちを解放するどころか、限定的な学びに私たちを押し込め、下手をするとその教育機関のイデオロギーに私たちを絡め取ることに作用しているように思える。

真の教育は私たちを解放し、どのような場所にあっても自らの人生を深め、この社会に深く関与していくようなたくましい知性と精神を養っていくはずである。間違ってもそれは、限定的な学びに私たちを縛るものではなく、特定のイデオロギーの中でうまく生きて行くことを教えるものではないはずだ。フローニンゲン:2018/7/17(火)07:39

#### 2854. 書くことと脳の可塑性

時刻は午前八時に迫ってきている。早朝の朝日が赤レンガの家々の屋根に美しく反射している。

---

確かに今日は空一面が薄い白い雲で覆われているが、それでも太陽の光は地上に差し込んでくる。今日は天候に恵まれているのだから、昼食前に必ずランニングに出かけたいと思う。

起床してから身体運動を行い、そこからしばらく日記を書くというのは一日の活動を本格的に始める上で非常に良い準備になっている。早朝の身体運動が体を目覚めさせるための準備であるならば、日記の執筆は精神を目覚めさせるための準備のように思えてくる。

毎朝日記を書くことは、その日一日の活動に大きな影響を及ぼしていることがわかる。日々の充実感と幸福感は日記の執筆によって生み出されていると言っても過言ではないだろう。そこに作曲実践やデッサンが加わることによって、毎日がより深いものになっていった。

日記を執筆していて最近よく思うのは、自分が特定の一つの主題について掘り下げて文章を書くというよりも、様々な主題を縦横無尽に行き来するように文章を執筆しているということだ。これは私の特性と合致した文章執筆方法であり、この執筆方法のおかげで、結果として特定の主題が螺旋を描きながら深まっていくことに気づく。

多様な主題について文章を書けば書くほどに、脳の可塑性が向上しているように思える。私は昔から一点集中のような、何か特定の対象に極度に集中するようなこともある一方で、注意が散漫なこともよくあった。注意が散漫というよりも、関心が多岐に渡り、思考が飛び飛びになることがよくあったと言いつつ換えることができるかもしれない。

正直なところ、大人になってもこの特性はあまり変わっていないように思う。ただし、学術的な探究の過程の中でどうしても辛抱強く考えることを迫られる体験をしてきたことによって、少しずつ一つの主題について深く考える集中力が身についてきたが、それはまだまだである。だがむしろ、注意散漫的な思考特性は自分の一つの個性を形成しているように思えてくる。ある一つの主題から次の主題に何の脈絡も無しに飛び移ることは、非線形的な思考の跳躍と呼ぶことができるかもしれない。

思考というものが本来ダイナミックシステムであり、線形的に進むよりも非線形的に進むことを好む傾向にあることを考えると、意外と自分の思考のあり方は考えることの本質に則ったものなのかもしれないとも思う。

---

一つの主題から次の主題に飛び移りながら思考を前に進めていくことによって、脳の可動領域がどんどんと拡張されていくのを感じる日々だ。脳が水のように感じられ、水はあらゆる形に姿を変えることができるように、思考が次々と変幻自在に形を変えていく。この傾向をさらに推し進めていくためには、とにかく日々文章を書き続けていくことが鍵を握るだろう。脳内に浮かんだ考えがどのようなものであっても、それが形になろうと望んでいるのであればとにかく文章にしておく。脳が水のように変貌を遂げることは、そのまま精神生活に反映され、水のごとく生きることを可能にするかもしれない。

コーヒーメーカーが一日分のコーヒーが入ったことを告げている。これから早朝の作曲実践に取り掛かり、一日の活動を本格的に始めていくことにする。フローニンゲン:2018/7/17(火)07:59

### 2855. 固有な体験からの学び

今日はもう少ししたら近所のノーダープラントゾン公園にランニングに出かけたいと思う。早朝の空を覆っていた薄い雲がどこかに消え去り、今は青空が広がっている。気温もほどよく、ランニングにはもってこいだと言える。

早朝に空を眺めていると、空から慈しみが降り注いでいるかのように思えてきた。本来は、毎日慈しみが天から降りてきているはずなのだが、私たちの曇った眼にはそれがなかなか認識されない。これはとても残念なことである。眼が曇っているというよりもむしろ、依然として眠りについた状態だと言えるかもしれない。現代人は寝ているか、幻覚を見ているかのどちらかだ。そのようなことをふと思う。

自宅の目の前の歩道の工事が少しずつ進んでいる。今日もゆっくりと工事が進んで行く。それは本当に目には見えないほどのゆっくりとした速度で進んでいる。工事が完成した時、私はおそらく何か特別な感情に浸ると思う。ゆっくりと進め、それを一つの形にしていくこと。目の前の通りの工事はその尊さを教えてくれるにちがいない。

今朝方に過去に作った曲を聴いていると、今から一ヶ月前に訪れたロンドンの記憶を思い出した。それもそのはずで、その曲はロンドンのカフェに立ち寄った際に作った曲だったからだ。ロンドンを訪れてから一ヶ月経つということが信じられない気持ちである。だが、来週末にデ・ホーヘ・フェルウェ

---

国立公園へ二泊三日のオランダ国内旅行に行く日が迫ってきていることを見ると、ロンドンを訪れてから確かにそれなりの時間が過ぎたのだということに気づく。

時間が着実に流れる方向に流れるべくして流れている。今日も明日もそのように時間が緩やかに流れていく。

早朝に改めて、体験から学ぶことの重要性について考えていた。確かに私たちは書物から学ぶことも多いが、体験を出発にして、自己の固有な体験から学びを深めていくこと以上に深い学びはないように思う。書物からの学びは得てして知的な学びに終始してしまいがちであり、存在を通じた学びにまで深まっていかない。クリシュナムルティも同様の指摘をしており、彼の書籍を先日に読んでいた時に大変共感したのを覚えている。

書物はもしかすると、自己が体験から学びを得ていくための間接的な支援をするために存在しているのではないかと思う。体験を真に深め、体験から深い学びを得ていくための観点を提供してくれるのが書物が果たす大きな役割の一つだ。この役割は極めて重要なのだが、体験そのものの貴重性にはかなわない。自らの体験は本当に固有のものであり、私たちは一人一人固有な発達プロセスを辿っていくがゆえに、自らの固有な体験を拠り所にして学びを深めていくことが求められる。

自己をハッとさせるような気づきや自己理解は、自らの体験に立脚したものであり、そうした気づきや深い自己理解は自分の体験から出発しなければ得られないように思える。書物だけを読んでいでは何の意味もないのだ。

これからランニングに出かけ、自らの体を存分に動かしたいと思う。これもまた一つの貴重な体験であり、ここから私はまた何かを学ぶだろう。フローニンゲン:2018/7/17(火)11:01

#### No.1136:Beginning of a New Season

The temperature of Groningen has been recently decreasing, and I can feel early autumn. In parallel with the beginning of a new season, my life seems to enter a new phase. Groningen, 10:08, Tuesday, 8/21/2018

時刻は夕方の四時半を迎えた。今日は素晴らしい快晴となり、昼食前にランニングに出かけた。それは多分に気分転換となり、心身の状態を整える上で素晴らしい時間となった。

今日はいつもより気温が高く、幾分暑く感じられるほどだ。書斎の窓のカーテンを閉め、太陽の熱が部屋に入っていないようにしている。今日は暑いと思ったら、最高気温が29度に到達する時間もあったようだ。今は27度ほどであり、明日は最高気温が24度とのことであるから今日よりは過ごしやすいい一日となるだろう。

今週末も先週末に引き続き、近くの教会に足を運び、オルガンコンサートに行こうかと考えている。突然計画が変わることも考えられるが、今のところ土曜日にオルガンコンサートに参加する予定だ。幸いにも、今週の土日はどちらも共に最高気温が23度ほどであり、天気も晴れようだ。

先ほど、昨日から読み進めていたクリシュナムルティの書籍を読み終えた。真の教育の重要な側面は、各自が最も関心を示すものが何かを発見する手助けをする、という主張はまさにその通りだと思う。一方で、現代の教育がその真の役割を果たせていない要因の一つには、仮に各自が最も関心を示すものが何かを発見したとしても、それをもとに生きていくことが難しいことにあるのではないかと思う。得てして、最も関心を示すものがいつの間にか経済的な収入を獲得するための道具に成り下がってしまい、しかも自分の好きなことで経済的に生きていける人はほんの一握りであるという社会的な状況がある。

確かに、好きなことを仕事にすることができ、それで副次的に経済的な安定性が得られることは望ましいのかもしれないが、ひとたび自分の好きなことがカネを獲得するための道具に成り果ててしまうと、好きであったことがいつの間にやら好きなものではなくなってしまうという状態を引き起こしかねない。そのようなことを考えてみると、現代における教育は、各人の好きなことを発見する手助けをした上で、それとは別の枠組みで経済的に生きていくような支援を行う必要があるように思う。私はやはりその一つとして投資教育が大事になると思っている。そもそも経済的な基盤を確立していく際に経済・金融のリテラシーは不可欠であり、現代人はこのリテラシーが極めて低いように思える。

---

現在確かに私は、「好きなこと」という言葉で括られることに一日のほぼ全ての時間を充てている。以前の日記で言及したように、今年か来年あたりに諸々の清算を済ませたら、それ以降は好きなことだけに従事した生活を送ろうと考えている。そうした生活を実現させるためには経済的な基盤が必要になるが、まさにそれを投資によって確立する試みをこの数年間静かに進めてきた。好きなことを好きなことであり続けるようにするために、それらの活動から金銭的な収入を得ることをせず、投資による収入を得るような仕組みが出来上がりつつある。

現在私が関心を寄せている芸術教育・霊性教育・投資教育をまずは自らに課してみることによって、それがどのような成果をもたらすのかを検証する試みをこれからも続けていこうと思う。投資に関しては学士課程で学んだことと最初のキャリアで培った知識と経験が活かしていることは幸いであるが、引き続き投資に関する学習も進めていく必要がある。数年後には、自らに課す投資教育の比重は下がり、芸術教育と霊性教育の比重がほとんどを占めるだろう。そのようなことを先ほどぼんやりと考えていた。フローニンゲン:2018/7/17(火)16:43

#### No.1137: Protection by Soul

The clouds that I saw in the early morning almost disappear, and now I can see the sun shining upon the ground. I affirm that my soul watches over me today, too. Groningen, 10:18, Tuesday, 8/21/2018

#### 2857. 今後の生活地について

起床直後に目を開けてみると、真っ赤に輝く朝日の姿が飛び込んできた。燦々と輝く朝日を寝室の窓からしばらく眺め、私は書斎に向かった。

六時の起床から六時半の一日の活動の開始までいつもと同じルーティーンを行った。天気予報を確認すると、今日も晴れとのことであり、気温は昨日よりも涼しい。昨日は幾分暑かったから、今日のような程よい涼しさを持つ気温は有り難い。

昨日から少しずつGRE試験用の単語を覚え始めた。試験自体は来月末にあり、今から一ヶ月後にある。オランダではGRE試験を受けられる会場が少なく、アムステルダムに二箇所あるぐらいだ。試

---

験開始の時間は九時であり、フローニンゲンから会場までの移動時間を考えると、試験の前日に前泊する方が賢明だと思われたため、先日ホテルを予約した。

アムステルダムの試験会場がある辺りはこれまで訪れたことがないため、試験の前日は散歩をし、その辺りの雰囲気やどのようなものかを感じ取りたい。四年振りにGRE試験を受けようと思ったのは、この四年間における学術的な英語力の伸びを確認するためと、実は米国のある大学院に芸術教育と教育哲学の双方を学ぶことのできる興味深い修士課程があることを見つけ、そこに応募するためでもある。

この一年間は学術機関から離れて探究活動をしていくが、来年はまた大学機関に所属することになるかもしれない。だが、以前から繰り返し述べているように、大学に雇われるようなことは基本的には望んでおらず、学術機関に所属しながら窮屈な形で自分の探究活動を進めていくことは望んでいない。

今はまだその大学院に受け入れられるかもわからないが、仮に受け入れられたとしてもそこで一年を過ごした後は再び学術機関から離れることになる可能性が高い。ただし、芸術教育と教育哲学の探究を進めていく土台を確立する上で、その大学院のプログラムは自分にとって望ましいものと思えた。今はその可能性についてだけ言及しておく。

昨日、オランダに在住のライターの方から取材を受けさせていただいたときに、オランダや欧州の他の国のビザ事情に関する雑談を少しばかりした。オランダは日本との協定があるため、観光や短期の滞在であれば日本人の場合ビザはいらない。ただし、長期間オランダに居住するためには居住許可証が必要である。しかし、その方の話によると、日本人であれば随分とその許可証が得やすいとのことであった。

話を伺いながら、今度オランダに戻ってくることあればフリーランスビザを取得する形でオランダに長期間住むことを考えたい。五年ほど連続してオランダの地で生活をすれば永住権がもらえるそうであり、今はその取得も視野に入れている。

昨夜も就寝前にぼんやりと今後の生活地について考えていた。このところそれについて考えることが多くなっているような気がする。仮に米国の大学院に所属することになったら、一年間の修士課

---

---

程を終えた後はOPTを活用するなりしてもう一年ほどその地に残りたい。だが、その後に米国にまだ残っていたいと思うのか、他の国で生活を営みたいと思うのかはその時になってみないとわからない。

今のところ、オランダやスイス、あるいは北欧諸国も生活の候補地に挙がっている。欧州での三年目の生活は自分の時間を多く持つことができるので、その間に、世界のどのような国で生活するのが自分のこれからの探究活動と創造活動に望ましいのかをゆっくりと考えたいと思う。自らの生活地についてゆっくりと考える時間を持つことに感謝をしなければならない。フローニンゲン:2018/7/18(水)06:48

#### No.1138: Swaying Leaves of Street Trees

Leaves of street trees are swaying. How peaceful today is. Groningen, 10:09, Wednesday, 8/22/2018

#### 2858. GRE対策に向けて

時刻は早朝の七時を迎えた。オランダの朝は早く、この時間帯には通勤や通学に向かう人たちの姿を見ることができ、自宅の前の通りの工事も始まった。今、静かに工事が進んで行く音が聞こえる。今日は風が吹いておらず、街路樹が静かにその場にたたずんでいる。空は晴れ渡っており、数羽の鳥たちが元気に空を舞っている姿を今眺めている。

先ほどの日記で書き留めたように、昨日から少しずつGRE試験に向けた勉強を始めた。試験勉強としてやることは明確であり、数学のセクションの勉強は問題形式の確認程度にとどめ、ライティングと語彙・英文読解のセクションの対策に時間を充てることである。

先週に対策問題集を解いてみたところ、四年前に比べて進歩が見られたことは喜ばしかった。今日から来月末の試験に向けて徐々に勉強を進めていくが、それは勉強というよりも一つの楽しみとして捉えることができる。この四年間の学術英語に関する進展を確認することができるという楽しみがあり、何よりもGREの単語を覚えていく作業が面白いということは幸いだ。確かにGREに出題される単語はTOEFLで出題される単語とは比べものにならないほど難しいが、それらを押さえておけば、

---

英語の学術論文や専門書を読むことがより容易になるということをこれまで実感していた。もちろんそれに加えて、ある専門領域の領域固有の単語に習熟する必要があるが、GREに出題される難解な単語を学習しておくことで英文読解の幅が格段に広がることをこれまで実感してきた。またこれは英文を読むことだけでなく、英文を書くことに関しても同じことが言える。

正直なところ、修士課程以上で学術的な文章を執筆する際にはGREに出題される単語を駆使することが必須のように思える。この二年間フローニンゲン大学に所属しながら種々の論文を執筆してきたが、その際にもGREに出題される単語の知識が非常に生きていた。

今回四年振りにGREを受験するにあたって、ここでもう一度GREに出題される単語を網羅的に抑えたいと思う。おそらくこの四年間で抜け落ちてしまった単語がある一方で、逆に学術生活を送る中で知らず知らず身についた単語もあるだろう。それらも含めて、ここでもう一度GREに出題される単語をしっかりと学び直したいと思う。

この学び直しは今後の私の探究活動にとってとても意味があるだろう。先日言及した書籍に掲載されている3861単語をしっかりと身につけたいと思う。まずは最初から最後までなるべく時間をかけずに一度確認し、どの単語をすでに身につけていてどの単語の理解が曖昧なのかを簡単に選別していく。一回目はできるだけ時間をかけずに最後まで辿り着くことがポイントであるが、昨日改めてこの書籍を開いてみたところ、随分と覚えている単語が多かったので、理解が曖昧な単語に関しては同義語や例文を書き記したり、イメージとして覚えるために余白にイラストを描いたりしようと思う。

朝昼夜の三回に分けて、一回あたり10ページほど進めていけば、今から八日後には一週目が終わる。そこから二周目は半分の四日間で終わるようにし、三周目は二日で終わるようにする。その後は覚えていなかった単語が一日で確認できるようになるだろう。

同義語を書き込んで単語のネットワークを拡張させていくことと、ネットワーク上の一つ一つのノードを強固なものにするために例文を書き込んでいくことが大切になる。また何より大切なのは繰り返しであり、反復のサイクルをどんどん短いものにしていくことだ。一ヶ月後の試験までに10回以上はこの書籍を繰り返し読むだろう。この一ヶ月で再び自分の単語力が強化されることを嬉しく思う。語彙の拡張作業はなぜだか自分を喜ばせる。フローニンゲン:2018/7/18(水)07:29

---

No.1139: Irreversible Time & Always Now

I often notice that I'm in my old memories, although the old times are irreversible. I come to realize that being in the memories of irrevocable times represents always being here and now.

Groningen, 10:22, Wednesday, 8/22/2018

2859. バロック時代の二人の巨匠テレマンとバッハ:ワークライフバランスについて

早朝の作曲実践を先ほど終えた。今日はここ数日間と同様に、バッハのコラールに範を求めた。現在はまだ二声のコラールを参考にして曲を作っている段階であり、楽譜に収められた69曲の全てを参考にした後は、371曲ほどの四声の曲を参考にしていく。

一日の始まりの作曲実践と一日の終わりの作曲実践はバッハのコラールを参考にしており、一日二曲ほどバッハから範を求めていることになる。仮にこれを今後毎日続けたとしたら、二声のコラールについては残り50曲であるから25日ほど時間を要し、371曲の四声の曲については半年ほどの時間を要するだろう。

いくら時間がかかろうともこれを成し遂げていく。そう思わせてくれたのは、バッハの曲に範を求めている時の自分の内側の感覚である。より正確には、バッハの曲に範を求め、出来上がった曲を聴いてみると、それは外見上は極めてシンプルで時間も短いものなのだが、何か大切なものが梱包されているように感じるのである。こうした感覚を一番強く引き起こしてくれるのがバッハの曲であり、それと同等のものを引き起こしてくれるのがテレマンの曲だ。後期バロック音楽を代表するこの二人の作曲家の曲は、自分の内側にある何か大切なものを喚起してくれる。

今日は昼食前か昼食後にテレマンに範を求め、夜にはまたバッハに範を求めたい。時間の余裕を見て、今日はベートーヴェンにも範を求めるかもしれない。

今日は週も半ばを迎えた水曜日である。今、通りを歩く親子の姿を見た。父親が小さな男の子を肩車しながら歩いている。今日は平日のはずなのだが、こうした光景は私の心をどこか和やかなものにしてくれる。オランダのワークライフバランスはとても優れているように思う。いや、多くのオランダ

---

人にとってはライフしかないのではないかと思われることも度々ある。おそらくそれが人間として真に生きる上で大切なことなのだと思う。そこにあるのは人生のみなのだ。

そもそもワークとライフが切り離される形で捉えられていることがおかしい。現代社会は二分法的な思考でワークとライフを捉えようとする。それら二つの乖離に人々は苦しむ。そのような構図が見えてくる。

オランダにやってきて、私の日々の生活は随分と変わった。それは肯定的な意味においてであり、人生の質がより豊穡なものになったことは間違いない。おそらくそれが私をオランダに長らく留めている理由の一つだと思う。また、今後もまたオランダに戻ってきたいと思うのもそのためだろう。

今朝も改めて、今度はアムステルダムかロッテルダムに住みたいという思いが湧き上がっていた。いずれかの都市に住むことになったとしても郊外である。オランダの郊外は本当に静かであり、平穏だ。深く静かな時間の中で毎日を送りたいと思う。実はまだロッテルダムに足を運ぶ機会がなく、実際に自分の目でその街を確かめる必要がある。今年のどこかでロッテルダムに足を運びたいと思う。

来月末はGRE試験を受けた後、フィンランドに行く。フィンランド、ノルウェー、スウェーデンなどは今後の生活拠点の候補になっている。また最近気になっているのはマルタ共和国だ。この国の気候は以前私が生活をしていた米国西海岸のアーバインに似ている。確かにアーバインの方がより涼しいが、どちらも雨が少ないことは共通している。マルタ共和国は英語が公用語として使えることも私にとっては有り難い。

この冬はイタリアとエジプトに行くことをせず、マルタ共和国に少しばかり滞在してみるのも良いかもしれないと考えている。そうした空想に浸りながら、これから午前中の仕事を前に進めていく。フローニンゲン:2018/7/18(水)10:06

#### No.1140: Season of Farewell

Leaves of street trees in front of my house have started to turn red. It is a sign of the end of summer and a harbinger of a new season.

---

My life continues to go in parallel with the flow of nature. Groningen, 10:52, Wednesday,  
8/22/2018

### 2860. 自分の取り組みに専心すること

時刻は夕方の六時を迎えた。今日の大半は強い日差しが差しており、午後に少しばかり太陽が雲に隠れる時間帯があった。穏やかな早朝の雰囲気を変えて思い出してみると、心が落ち着く。そよ風の音に耳を傾けると、こうも心優しい気持ちになれるのだ。

優美な時間の流れの中で生きること。それが常態化し、優美さが即日々だと言えるような状態になってきている。時間がゆっくりと流れ、緩やかな時間の流れの中で自分が取り組むべきことに専心する日々が続く。

他人が自分の取り組みにあれこれ何か意見を述べたとしてもそれに耳を傾けてはいけない。残念ながら人の取り組みに意見を述べる人は、自分の人生において取り組むべきことを持っていないのだ。ライフワークとも呼べるべきものがないがゆえに、意識を集中する対象を持たないがゆえに、人の取り組みにとやかく口を出そうとする輩には注意しなければならない。そうした人との付き合いを一切絶つ日も近づいている。

このところ就寝前にこれからの生活地について考えることが多い。どのような場所で生活をするかは精神生活に多大な影響を及ぼすがゆえに生活拠点の選定は非常に重要だが、これまでの自分の人生を振り返ってみた場合、大抵運命的な導きによってある拠点で生活を営むことが始まる。

これからの生活地についてあれこれ考えてみたところで、結局は何かの導きによってある場所で生活を始めるのであるから、どこに落ち着くかなど今から考えてもしょうがないのだ。人は将来について考えたがる。

自分にとってはまだ欧州での三年目の生活が始まっていないにもかかわらず、その後の生活について考えようとしている。将来の計画はほどほどに立てればいいのであって、今に生きたいと思うことがある。自分はどうしても先のことを考えてしまう特性があるようなのだ。そうした自己理解を出発点にして、今に集中したいと思う。

---

先ほどベートーヴェンの曲に範を求め、午後六時の段階において三曲ほど作った。これから入浴をし、夕食を食べてからは、再びGRE対策を行いたいと思う。早朝の日記で言及していた単語集の学習が予定通りのペースで進んでいる。一日に30ページ進めていくのが今のところちょうど良いようだ。この調子でいけば八日で一週目が終わる。二集目はその半分の時間で終わるようにする。同義語や例文を書き込んだり、時にはイラストを自分の手で描いたりしながら重層的に単語のネットワークを拡張させている。

四年振りにGREを受けてみることはやはり望ましかったように思う。というのも、GREで出題される難解な単語を再度学習し直すことができているからだ。そのおかげで、今後学術的な論文や専門書を読む際の理解度が高まり、執筆する文章の語彙的な密度も向上するであろう。夕食後からはもう6ページほど学習を進めたい。

六年前に初めてGREを受験した時は、この単語帳に掲載されている単語は八割型わからなかっただろうが、今となってはその割合はほぼ逆だ。客観的に見ると、七割から八割ほどはすでに知っている単語であり、残りの単語がまだ自分のものになっていない。六年前からの進歩をこのような形で実感することができて嬉しく思う。単語の学習も楽しむ工夫を施しながら、焦らず着実に進めていきたい。フローニンゲン:2018/7/18(水) 18:28

#### No.1141: Slow Steps

I took a GRE test in Amsterdam. Now, I'm finally free from studying for the examination. Although I had thought that I would not go back to the academic world, I plan to apply for a graduate school in the US because I found an intriguing program to perfectly match my interest. I'm relieved I've obtained my target scores in both two sections today. Groningen, 17:29, Thursday, 8/23/2018